

2025 年度 2 月 (英語)

問 1

『栄花物語』が時に歴史書というよりも主に文学作品として見なされる事実は、この書物が物語の技法や慣習にどれほど負っているかを示している。

問 2

作者は行事をあたかもそれらが目の前で起こっているかのように描写し、物語の文体に典型的な感覚的で絵画的な質感をそれらに付与している。

問 3

輝かしく晴れた日の描写は、盛大な祭事や儀式の記述を縁取り、その場の華やかさや喜びと調和し、また強調する。一方、深い雪の陰鬱さは、葬儀に参列する者たちの嘆きの心情を映し出す。

問 4

松村博司と河北騰は、『栄花物語』の最初の部分において「明るい」章と「暗い」章の対比が存在することを指摘している。すなわち、陰鬱で悲しい出来事を中心とする章(5、7、9、10)が、明るく喜びに満ちた出来事に充てられた章(6、8、11)と並置されているというのである。

問 5

主題・手法・言葉における作者の革新は、構想と出来映えの未熟さによってしばしば損なわれてはいるものの、日本の歴史叙述の発展において重要な一里塚をなすものであった。すなわち日本の歴史叙述を、もはや中国の歴史叙述の慣例を無味乾燥に反映させたものではなく、認識された現実に対する生きた、真に感じられた反響へと変貌させたのである。

問 6

作者は、紫式部が物語の基本的な動機として定めた「人間的関心」という単純な原理を自由に追求することができた。

問 7

会話、直接引用の心中表現や和歌が見られる点、作者自らが物語内に顔を出して感想や説明を加える点、自然を心情を映し出すものとして描写する点、各章にタイトルを付ける点、章の並べ方が対照的になるように工夫されている点、劇的な効果を得るために事実を意図的にゆがめて書いている点が指摘されている。

【国文学】

一

I群

a（大伴旅人）

奈良時代、『万葉集』の歌人で、家持の父である。晩年、大宰帥として筑紫に赴任し、山上憶良らとともに筑紫歌壇を形成した。『万葉集』に載る歌は、ほとんどが筑紫時代のもので、妻の死去に際しての歌、望郷の歌、酒を讃える歌などが知られている。また、神仙思想や老荘思想から影響を受けた作品も見られる。

b（『後撰和歌集』）

平安時代、『古今和歌集』に次ぐ第二番目の勅撰和歌集である。九五一年に村上天皇から勅命が下った。撰者は大中臣能宣、清原元輔ら五人で、梨壺の五人と呼ばれる。『古今和歌集』より恋部を一卷増やしているが、その恋を中心とする貴族の私的な贈答歌が多く取られ、詞書が長く歌物語的な作品に特色がある。

c（『落窪物語』）

平安中期の現存最古の継子いじめの物語である。成立年、作者ともに未詳。継母にいじめられ、落窪に押し込められていた姫君を少将が救い出し、継母に報復するが、後には一家共々幸福になるという内容で、写実的な叙述が特徴である。後の継子物語の先駆けとなり、『源氏物語』にも影響を与えた。

d（後鳥羽上皇）

平安末期から鎌倉初期の上皇である。天皇讓位後、和歌に関心を寄せ、百首歌や歌合を盛んに主催した。『新古今和歌集』の撰集を命じたが、自らもその編纂に深く関与し、竟宴後も切り継ぎを行い、承久の乱での敗北によって隠岐に流された後も、これを精撰した。私家集に『後鳥羽院御集』がある。

e（蕉風）

松尾芭蕉とその門流の俳風のこと。洒落やおかしみを主とした貞門や、素材や表現の奇抜を狙った談林のように遊戯的な傾向が強かった俳諧に対して、さび・しおり・ほそみ・軽みを重んじて、幽玄・閑寂の境地を求めた。門弟の服部土芳の『三冊子』や、向井去来の『去来抄』によってその詳細を知ることができる。

II群

a (『アララギ』)

短歌結社雑誌。明治四一年創刊。正岡子規の根岸短歌会の系譜で、写生の重要性を唱え、『万葉集』を作家の理想とした。主な歌人に伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、斎藤茂吉、土屋文明、佐藤佐太郎、近藤芳美。積極的に他派との論争を展開し、大正期には歌壇の中心を占めるに至った。

b (新感覚派)

大正十三年に創刊された『文芸時代』を拠点とした新進作家、横光利一、川端康成、片岡鉄兵、中河与一などを総称している。千葉亀雄の評論「新感覚派の誕生」がその名の由来で、革新的な表現が目された。プロレタリア文学の隆盛に対峙するものとして理解されてきた(平野謙の「三派鼎立」)。

c (第三の新人)

昭和二十年代後半以降、文壇作家となった安岡章太郎、吉行淳之介、小島信夫、庄野潤三、遠藤周作などを総称している。山本健吉の同名の評論がその名の由来。第一次・第二次戦後派の政治性・観念性に対し、私小説的な身辺性に傾斜した点を特徴とする。同伴者的な評論家に服部達がいる。

三

I

問一

人しれぬなみだの河のせをはやみくづれにけりな人めつゝみは

問二

(翻字) きさきのかくれ給をば崩すといふその文字をばくづるとよむなり

(現代語訳) 后がお亡くなりになるのを「崩す」という。その文字を「くづる」と読むのだ。

問三

歌合など公的な場で披露される和歌のこと。

問四

和歌で「くづれ」と詠んだ点が誤りである。本文中の和歌は、女院の北面の菊合の際に、恋

の歌として詠まれたものだが、后が亡くなることを「崩す」と言い、「崩」は「くづる」とも読むことから、歌で「くづれ」と詠むのは不謹慎だからである。

II

問一 『吾輩は猫である』で同時代社会における知識人・世俗人の両方を風刺した漱石は、明治三十九年に『野分』、翌四十年に『二百十日』を発表し、正義の問題を真っ向から取り上げた。こうした視座は『虞美人草』『三四郎』に引き継がれた。しかし『それから』が示すように、社会的慣習ならびに圧力、思弁的に導かれた理想的な生の姿、個人の間で「自然」に抱かれる情愛・誠意の念など、種々の顧慮すべき価値の間の葛藤は、調停不可能なものとして把握された。また晩年の『明暗』も未完に終わり、「我執」（江藤淳）からの救いはありえるのか、また階級的対立は回避しうるのかについても、答えは示されないままに終わった。

問二 その作の作為性を指摘された夏目漱石は「田山花袋君に答ふ」で、「拵へものを苦にせらるゝよりも、生きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだらう」と応じている。実篤の用いた比喻は、こうした花袋流の自然主義と漱石との、創作スタイルならびに文学観の対立を踏まえたものである。

問三 トルストイに学んだ人道主義的な考えと、個人主義的な自己を尊重する考えとの調和、あるいは不調和が、初期の武者小路実篤の思想を特徴づけるものである。この文章は両者の調和への期待に基づくが、やがて不調和が強く意識されるようになり、エゴイズムの肯定への傾斜を強めていく。その表れが『お目出たき人』で、思想的支えになったのがメーテルリンクだった。しかし第一次世界大戦を契機として、ふたたび人道主義へと向かうことになり、たとえば戯曲「或る青年の夢」を生んだ。

問四 『白樺』に掲載された「雑感」を中心に、自己に対する信頼を率直に表明する実篤のスタイルが当時の若者の心を惹きつけた。これは後に芥川龍之介に「文壇の天窓」をさわやかにあげ放つものだったと回顧された。一方で小説における描写の粗雑さ、思索の楽天性を非難する者も少なくなかった。少し時代は下るが、生田長江の「自然主義前派の跳梁」はその痛烈な表れだった。

三

※論述問題につき解答省略。

【国語学】

問題一

ア(連濁)

複合語において後部要素の語頭の清音が濁音になる現象。「くさ+はな↓くさばな」における「[ha>ba]」のようにこの濁音化は有聲化ではなく、また、前部要素と後部要素が同格の場合、後部要素にすでに濁音がある場合には連濁しない(ライマンの法則)など、単純な音声同化現象とは言いにくい。また、中世には漢語の語末鼻音のあとに連濁を起こす連声濁(うむの下濁る)が盛んに生じたが、現代では生産性を失っている。

イ(『日本辞書 言海』)

大槻文彦により編纂刊行された日本最初期の近代的国語辞典。明治二二年から二四年にかけて四分冊で刊行。「日本普通語」の辞書を目指し、発音・品詞・語源・語義分類を伴う語釈・出典の情報を付した記述を行っている。また、和語と漢語で見出しの活字を変える点や、語の漢字表記を和・漢の両面から示している点も興味深い。なお、付録の文法「語法指南」は、穏健な文法書として教科書文法としても用いられた。

ウ(アクセント核)

アクセントが高↓低と下がる下がり目をアクセントの滝と言い、その直前の高いモーラをアクセント核と言う。東京方言の場合、アクセント核の有無と、存在する場合はその位置によって、語のアクセントを弁別する。なお、京都方言の場合には、高起式・低起式の区別やモーラ内における下降が見られ、語声調アクセントの性質も帯びる。

エ(ラ行変格活用)

文語における活用型の一種で、「あり・をり・はべり・いまそかり」の四語のみが所属し、すべて存在の意味を有する。文語動詞の中で唯一、終止形がイ段音で終わり、江戸時代二ハ、意味および形態から形容詞類の一種として扱う立場もあった。アスペクトの意味を持った補助動詞として用いられるとともに、「にあり>なり」「てあり>たり」「多くあり>多かり」など、形容詞・形容動詞・一部の助動詞に関わる造語力を合わせ持つ。

オ(富士谷成章)

江戸時代(一七〇〇年代)に活躍した国学者。漢学者の兄皆川淇園の影響を受けるとともに、友人上田秋成は成章の影響のもと「也哉抄」を著した。著述の代表的なものとしては、副用語類の語義を解説した「かざし抄」、および助詞・助動詞類の用法を論じた「あゆひ抄」が有名で、品詞分類、用言の活用表、五十音図におけるオ・ヲ所属の訂正などは、極めて先見的な研究として評価できる、

問題二

- ア 品詞を単語を文法的な性質から分類したものと定義したうえで、
- ① 品詞分類の対象となる単語の定義（単語でないものは品詞分類の対象とならない）
 - ② 品詞分類の基準となる文法的性質の内実
- の二点から、代表的な文法学説を取り上げながら具体的に論じる。

イ 言文一致体という概念の発生時期とその定義に触れたうえで、

- ① 二葉亭四迷などによる初期言文一致体作品の状況
 - ② 尾崎紅葉による「である」体の採用
 - ③ 明治三〇年代後半から明治四十年代における確立期の言文一致体小説の到達点
- などについて、時期的な変遷を踏まえつつ、どのような部分にそれぞれの時期の特徴が現れるか、何をもって言文一致体の確立と捉えるかについて論じる。

ウ 江戸時代後期から明治時代にかけての主にオランダ語・英語から輸入された事物概念の翻訳法について、

- ① 江戸時代におけるオランダ語からの翻訳方法の特徴と主に翻訳された語彙の意味分野
 - ② 幕末以降、明治時代に英語から翻訳された語彙の意味分野と翻訳方法のバリエーション
- などについて、具体的に論じる。

問題三

※論述問題につき解答省略。

【漢文学】

問題一

(一) 項羽漢軍の四面に皆楚歌するを聞きて、驚きて曰はく、「漢皆已に楚を得たるか」と。乃ち夜起ちて帳中に飲す。美人有り。姓は虞氏。常に幸せられて従ふ。乃ち悲歌慷慨して自ら歌詩数曲を為る。美人之に和す。項羽泣下ること数行。左右皆泣く。是に於いて羽遂に馬に上る。戲下の騎従する者百余人。夜囲みを潰して出づ。

(二) 項羽が垓下で敗北したとき、虞姫は先に自害した。鄭君はかつて項羽に仕えていたが、彼が死ぬと漢に属した。漢帝（劉邦）は項羽の臣下たちに、（亡君を呼ぶ際、字の「羽」ではなく、名の）「籍」で呼ぶよう命じたが、鄭君だけはその詔に従わなかった。帝は（命

令通り)「項籍」と呼んだ者を大夫に取り立て、鄭君を追放した。(このことは)鄭当時の伝に見える。

(三)

書き下し文

帳下の佳人 涙痕を拭ふ

門前の壮士 気 雲のごとし

蒼皇として君王の意に負かざるは

虞姫と鄭君とのみ有り

口語訳

帳の下では美人(虞姫)が涙の痕を拭っている。

垓下を包囲する漢の軍勢の意気は雲のように沸き立ち盛んである。

垓下での敗北に誰もが周章狼狽する中、項羽の君恩に背かなかった者としては、

項羽に先立ち自害した虞姫と、亡君・項羽を、字でなく名で呼べという漢帝の命に従わなかった鄭君があるばかりだ。

問題二

※論述問題につき解答省略。

二〇二五年度二月(博士後期・専門科目)

【古典国文学】

一

問一

みやこいでできみにあはんとこしものをこしかひもなくわかれぬるかな
しろたへのなみちをとほくゆきかひてわれににべきはたれならなくに

問二

二十六日。やはりこの日も新国司の館でもてなしがあり、騒ぎ通して、従者にまで授け物があった。漢詩を、声高く朗詠した。

問三

初句に母音連続があるため

問四

土佐日記は作者を女性に見立てて仮名で書いている。漢詩は男性社会のものであり、女性である作者は書くことができないため。

問五

土佐日記

二

※論述問題につき解答省略。

【近代国文学】

一

問一 プロレタリア文学の使命の一つは、史的唯物論の視座から現実を記述し、労働者階級の置かれた不当な地位を明らかにすることである。しかし労働者階級の強いられている不当なありようは、イデオロギーにより覆い隠され、また正当化されている。そのため、この不当性を明らかにするプロレタリア文学は、「暴露」の語にふさわしい意味合いを帯びている。

問二 菊池の判断とは裏腹に、日本のプロレタリア文学の代表的な作家の多くは、「プロレタリア・ロマンチズム」の名の元に理解されるのが適当である。私小説・心境小説のモードに従い、プロレタリア文学の従事者もまた生活態度、この場合は革命という「理想と夢」に対してどれだけ真摯に向き合ったかという基準をもって評価が下されたからである。小林多喜二はその典型で、出世作である「一九二八年三月十五日」にしても「独房」にしても「党生活者」にしても、作の評価は彼が実際に、いかに「理想」の実現に向けて尽くしているかという観点と無縁ではない。そして昭和八年、虐殺されるに至り、「理想」に殉じたその姿は、たとえば転向を経た中野重治のその後、またプロレタリア文学に与さなかった同郷の後輩である伊藤整に、深い影響を及ぼし続けることになった。

二

※論述問題につき解答省略。

【国語学】

問題一

ア 日本語における文字表記について、

- ① 表音文字（仮名）を使用すること
- ② 表語文字（漢字）を固有語（訓）と借用語（音）の両者に対応させること
- ③ 仮名と漢字を交用すること

の3点から、それらの特徴がいつから行われはじめ、どのように現代につながるかを具体的に論じる。

イ 中国語との接触、またはオランダ語・英語などの西洋諸語との接触のどちらかに絞る、

- ① 日本語の語彙に与えた影響
- ② 古典中国語の訓読や西洋諸語の翻訳が日本語の文体の文体に与えた影響
などに注目しながら、その実態を説明するとともに、現代日本語の文体に与えた影響について論じる。

問題二

※論述問題につき解答省略。

【漢文学】

問題一

問一 書物の価値を全く認めず、手に入りやすい当たり前の書物を軽々しく棄ててしまえばかりか、家に伝わる貴重な書物や、幼時に読んだ優れた書物まで、いい加減な扱いをして、ついには散逸させてしまう。

問二

書き下し文 己れ書を読むこと能はずと雖ども、他日子孫或いは能く書を読む者有りて好書を求むるとき得べからざることを思はず。

現代語訳 自分は書物を読めないとしても、後世の子孫の中に読むものがいて、優れた書物を欲しいと思っても手に入らないことがあるかもしれないと思いません。

問三 善本は、日々の読書に用いて傷んだり、誰かに盗まれたりして、いったん失われれば二度と手に入らないから。

問四 善本は、必ずその副本を作り、原本は秘蔵すべきあり、その有無を人に知らせるべきではない。

問題二

※論述問題につき解答省略。